大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

曾鞏の妻に対する観念：女性墓誌銘を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 雪云 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002940

人間社会学研究集録７(2011)，3-24（2012年2月刊行）

曾鞏の妻に対する観念

―女性墓誌銘を中心として

林 雪云*

はじめに

曾鞏（1019～1083)、字は子固、北宋中期の文学者である。これまで中国文学界では、曾鞏の宗法思想、文学作品、文学理論については、犀利な研究が行われてきたが、彼の女性観に対する研究は殆んど行われてこなかった。このことに鑑み、本論においては曾鞏が書いた女性の墓誌銘を読み、彼の視野にとらえられた女性の日常生活、及び曾鞏の描く理想の妻像を探究していきたいと考える。曾鞏の妻像を検討すると同時に、同時代の文人梅堯臣の妻像と大まかに比較し、彼らの相異点に対する分析を通じて、北宋文人の基本的な思考様式、価値基準、審美観を探究しようと考える。

第一章　女性の墓誌銘について

墓誌銘とは「墓の中に埋める、死者の事績を刻んだ石である。「志」と「銘」の二つの部分に分かれる。「志」は散文のスタイルを用い、死者の姓名・日常生活を記述する。「銘」は韻文で、死者を称賛し、哀悼する」[1]機能を持つとされる。墓誌銘はいつ始まったのか？女性の墓誌銘はいつ始まったのか？史籍を渉猟しても、明確な資料は見出せない。「女性の墓誌銘は南朝に出現した」などという曖昧な記述は目にするけれども、具体的な証拠に乏しく、決定することはできない。

男性の墓誌銘にしてからが、その起源に関しては諸説紛々である。明代の呉訥は『文章辨體序説』の中で、「事祖廣記に曰う、古えは葬には豐碑有りて以て窆る。秦漢以来、死して功業らば、則ち上に刻し、稍や改めて石を用う。晉宋の間神道碑と稱うるを開始す。蓋し地理家は東南を以て神道と爲し、碑は其の地に立つをもって名づくと云う。」[2]〔事祖廣記曰「古者葬有豐碑以窆。秦漢以來、死有功業、則刻於

---

* 大阪府立大学人間社会学研究科人間科学専攻（博士後期課程）

[1]『漢語大詞典』（上海漢語大詞典出版社　一九九七年刊)。

[2] 于北山校點『文章辨體序説』（人民文學出版社 一九八二年刊）五十二頁。

上、稍改用石。晉宋間開始稱神道碑、蓋地理家以東南為神道、碑立其地而名云耳」〕

と述べ、同時代の徐師曾は『文體明辨序説』で、「按ずるに、誌は記するなり、銘は名づくるなり。古の人德善功烈の世に名だたる可き有り。歿すれば則ち後人これが爲に器を鑄て以て銘し、無窮に傳わら俾む。…漢に至りて杜子夏始めて文を勒して墓側に埋め、遂に墓誌有り、後人これに因る。」[3]〔按、誌者、記也、銘者、名也。古之人有德善功烈可名於世、歿則後人為之鑄器以銘、而俾傳於無窮…至漢、杜子夏始勒文埋墓側、遂有墓誌、後人因之〕と指摘している。この他、明代王行の『墓誌銘舉例』、清姚鼐の『古文辭類纂』などが墓誌銘に関して様々な考証を行っている。中でも清の趙翼はその著『陔餘叢考』[4]巻三十二において、極めて詳細に論じ、女性の墓誌銘についても触れている。

> 墓誌銘の始めは、王阮亭の池北偶談に謂う、事祖廣記は炙輠子を引きて以て王戎馮鑒に始まると爲す。事始は西漢の杜子春に始まると以(な)し、高承の事物紀原は以て比干に始まると爲す。槎上の老舌は孔子の喪は、公西赤これを志し、子張の喪は公明儀これを志すを引き、以て墓志の始めと爲す。…惟だ封氏見聞録に、青州古冢に石刻銘有り、青州世子東海女郎とあり。賈昊は以て東海王越の女にして、荀晞の子に嫁す者と爲す。司馬温公も亦た南朝始めて銘志の墓に埋めるの事有りと謂う。然るに賈昊の東海王越の女を辨識する一事は亦た南史に見え、則ち晉に已に墓志の例有り。…荘子に云う、衞の靈公葬を沙丘に卜す、これを掘りて石椁を得たり。銘有りて曰く、其の子に憑らずと。靈公乃ち奪いてこれを埋むと。則ち春秋以前に已に墓中に銘する有り。此の數事に由りて觀れば、則ち墓銘の來るや已久し。而るに王儉宋元嘉中顔延之自り始めと謂うは、此れ又た何の説ぞ？竊かに意うに、古來墓に銘するに、但だ姓名官位を書す、間まに或いは數語を其の上に銘す。而るに撰文叙事し平生を臚述するは、則ち顔延之より起こると。
>
> 〔墓志銘之始、王阮亭池北偶談謂、事祖廣記引炙輠子、以爲始于王戎、馮鑒。事始以始于西漢杜子春、而高承事物紀原以爲始于比干。槎上老舌又引孔子之喪、公西赤志之、子張之喪、公明儀志之、以爲墓志之始。…惟封氏見聞錄、青州古冢有石刻銘、云青州世子東海女郎、賈昊以爲東海王越之女、嫁荀晞之子者。…司馬溫公亦謂南朝始有銘志埋墓之事。然賈昊辨識"東海王越之女"一事、亦見南史、則晉已有墓志之例。…荘子云、衞靈公卜葬於沙丘、掘之得石椁、有銘曰、不憑其子、靈公乃奪而埋之。
>
> 則春秋以前已有銘于墓中者矣。…由此數事以觀、則墓銘之來已久。而王儉謂始自宋元嘉中顔延之、此又何說？竊意古來銘墓、但書姓名官位、間或銘數語于其上、而撰文敘事、臚述生平、則起于顔延之耳。〕

引用した三つの文章によると、明代の徐師曾は漢代に始まると見ているし、呉訥

---

[3] 羅根澤校點『文體明辨序說』（人民文學出版社 一九八二年刊）一百四十八頁。

[4] 清趙翼著『陔余叢考』（商務印書館出版 一九五七年刊）六百八十二頁。

は晋宋のあたりに始まると考えているし、趙翼は真の意味の墓誌銘は顔延之から始まると推定している。また范文瀾は『中国通史』の「西晋文化」篇で、「後漢時代に碑を立てることが非常に流行した。そこで、曹操は命令を出して豪華な葬礼を禁じ、碑の建立を禁じた。晋の武帝は詔を下して禁止令を廃止し、それ以後墓誌銘が碑文にかわって盛んになった。」[5]というわけで、男性の墓誌銘は晋と南朝の宋の間に出現したことが分かる。男性の墓誌銘の習俗は秦漢時代まで遡ることができるが、当時はきまった体例がなく、墓誌銘にも誌と銘の両方を含んだものはなかった。墓主の家系や生涯などを記してはいるものの、墓誌銘の前身もしくはひな形に過ぎず、本当の意味の墓誌銘ではなかった。

それならば、女性の墓誌銘はどうであろうか？『陔餘叢考』でとりあげられた、唐代の封演著の『封氏見聞録』に「青州古冢に石刻銘有り、青州世子東海女郎とあり」〔青州古冢有石刻銘、云青州世子東海女郎〕とあるからには、晋代にすでに女性の銘文があったことは確かである。これは最も早い女性の銘文の例であろう。『全上古三代先秦兩漢魏晋南北朝文』を通覧した結果、探し出すことのできた最も早く、最も完備した女性の墓誌銘の例は、任昉撰、劉瓛の妻王氏の墓誌銘「劉先生夫人墓誌」[6]であり、『文選』巻五十九に収められている。全文は以下の通り。

> 既に萊婦と稱せられ、亦た鴻妻と曰わる。復た令德有り、壹にこれと齊しくす。實に君子を佐け、蒿を簪とし藜を杖とす。欣欣として負載し、冀の畦に在り。居室にも有行にも、亟しば義讓を聞く。訓えを丹陽に稟け、風を丞相に弘む。籍甚なる二門、風流は遠く尚し。肇めは允に才淑、閫德斯に諒なり。鄭鄉に蕪没し、楊冢に寂寥たり。參差たる孔樹、毫末も拱を成す。暫く荒埏を啓き、長えに幽隴を扃ざす。夫は貴く妻も尊きは、爵に匪ずして重んぜらる。
>
> 〔既稱萊歸、亦曰鴻妻、複有令德、壹與之齊。實佐君子、簪蒿杖藜、欣欣負載、在冀之畦。居室有行、亟聞義讓。稟訓丹陽、弘風丞相。籍甚二門、風流遠尚。肇允才淑、閫德斯諒。蕪沒鄭鄉、寂寞楊冢。參差孔樹、毫末成拱。暫啓荒埏、長扃幽隴。夫貴妻尊、匪爵而重。〕

全体から見て、墓誌銘とは言うものの、実は「銘」だけあって「志」のないただの銘文である。全篇これ四字句から成り立っていて、内容もひたすら死者に対する賞賛のみで、その家系や生涯については何一つ記載がない。ただし、女性の墓誌銘も男性の墓誌銘とほぼ同時期に出現したということは言える。唐代宋代に入ると、

---

[5] 范文瀾著『中國通史』（北京人民出版社　一九七八年刊）第二册　三八四頁。

[6]（梁）蕭統編；(唐)李善注『文選』（北京中華書局　一九七七年刊）巻五十九　一二九一頁。

韓愈、柳宗元、歐陽修、曾鞏といった多くの古文作家が、女性の墓誌銘の製作に手を染めた。この時期の墓誌銘にはすでに明確な体例が備わっていた。「墓誌は則ち世系歳月名字爵里を直述し、用て陵谷の遷改に防(そな)うるなり。…凡そ碑碣の外に表るる者は、文は則ち稍や詳しく、誌銘の壙に埋めらるる者は、文は則ち嚴謹たり。…大抵碑銘は德善功烈を論列する所以にして、銘の義は美を稱して惡を稱えずと雖も、以て孝子慈孫の心を盡くす。」[7]〔墓誌、則直述世系、歳月、名字、爵里、用防陵谷遷改。…凡碑碣表于外者、文則稍詳、誌銘埋於壙者、文則嚴謹。…大抵碑銘所以論列德善功烈、雖銘之義稱美弗稱惡、以盡其孝子慈孫之心…〕と清代の呉訥が述べる通りである。それでは以下の章で曾鞏筆下の女性墓誌銘を見てみよう。

第二章　曾鞏の書いた女性墓誌銘

曾鞏は生涯にわたり、多くの詩歌・散文を残した。欧陽修らとともに散文の革新運動にかかわり、大きな功績をあげ、文学史上「唐宋八大家」の一人として名声を享受している。欧陽修は「送楊辟秀才」詩の中で、「吾は曾生を奇とす、始めはこれを太學に得たり。初めて謂う　獨り軒然として、百鳥の一鶚なりと。」[8]曾鞏とともに欧陽修の門生であり、同年の進士（嘉祐二年 1057）でもあった蘇軾も、口を極めて曾鞏を推奨している。蘇軾は伯父の蘇渙の墓誌銘を書いてくれるように曾鞏に手紙で頼んだ。それが曾鞏の「贈職方員外郎蘇君墓誌銘」である。蘇軾は「曾子固の越に倅するを送る、燕字を得たり」詩で、曾鞏を次のように称賛する、「醉翁門下の士、雑遝して賢爲り難し。曾子　獨り超軼し、孤芳　群研を陋(いやし)む。」[9]このように曾鞏は欧陽修門下でも重きを為していた。

曾鞏の文集には、全部で六十篇の墓誌銘が収められており、その中の二十五篇が女性の墓誌銘で、二分の一弱を占めている。しかしこれまで専ら曾鞏の女性墓誌銘を対象にした研究はなく、曾鞏研究の盲点となっていた。たまたま曾鞏の女性墓誌銘に触れてはいても、曾鞏の墓誌銘の特徴や価値の分析の一環としてであったり、他の文学者の墓誌銘と比較する材料として取り上げられた場合に限られる。そこで本論文では曾鞏の妻に対する観念という切り口から考察を加えてみたい。曾鞏が書

---

[7] 于北山 校點『文章辨體序说』（人民文學出版社　一九八二年刊）五十三頁。
[8] 洪本健校箋『歐陽修詩文集校箋』（上海古籍出版社　二〇〇九年刊）巻二　三十四頁。
[9] 傅成 穆儔標點『蘇軾全集』（上海古籍出版社　二〇〇〇年刊）上冊　詩集巻六。

いた二十五篇の女性墓誌銘から、妻はかくあるべしという理想像をはっきりと見て取ることができるのである。

墓誌銘はその名の通り、埋葬されている人を紹介する文章である。墓誌銘を書く側と、書かれる側には一般的に言って何らかの情誼が存在するはずである。これらの墓誌銘の中では、曾鞏が他人のために書いたものもあれば、自分の家族や親しい友人のために書いたものもある。墓誌銘の内容から、二十五篇のうち、十二篇は親しい人物のために書かれており、行間には濃厚で真摯な感情が満ちている。この十二篇は、岳父の姉の謝氏、外叔の祖母の戴氏、妻の祖母の張氏、妹婿の母傅氏、もう一人の妹婿の母周氏、舅母（母の兄弟の妻にあたるおば）の沈氏、その他彼の四人の妹と妻の晁氏、そして二人の娘の墓誌銘が含まれ、悲痛な感情があふれている。妻の晁氏のために書いた「亡妻宜興縣君文柔晁氏墓誌銘」[10]を例としてあげよう。

> 蓋し天はこれに徳を畀(あた)うるも其の年を夭とす、遺りて以て余を相(たす)けこれを奪うことと蚤(はや)し。余は其の所以を知らず、又其のこれを哭して慟するを知らざるなり。…人孰か貴からずや、子は其の窮に逢う。世誰か壽ならずや、子は其の凶に罹る。…遺りて以て余を輔け、曾て逡巡せず。歳云に其れ逝き、予の悲しみ孔だ新し。…
>
> （蓋天畀之德而夭其年、遺以相余而奪之蚤。余不知其所以、而又不知其哭之慟也。…人孰不貴？子逢其窮。世誰不壽？子罹其凶。…遺以輔余、曾不梭巡。歳雲其逝、予悲孔新…）

妻を喪った悲しみを描写するのに、泣き叫んだり地団太を踏んだりするような大げさな表現は用いず、人格は高かったが薄命であったと繰り返すことによって内心の苦痛の深さを浮き彫りにしている。曾鞏が亡妻の墓誌銘を書く際には、一見感情を表に出さないように思えるが、亡妻の賢さとしとやかさを綿々と追憶しており、妻に対し深い愛情を懐いていたことは言うまでもないだろう。妹のために書いた「江都縣主簿王君夫人曾氏墓誌」の中で、曾鞏は「天なるかな、吾れ伯姉を哭して始めて期を逾え、又吾が妹を哭しこれを誌す、其れ哀しむべきなり、其れ哀しむべきなり」/「天乎！吾哭伯姊始逾期、又哭吾妹而志之、其可哀也已！其可哀也已！」 と言っている。兄が妹を思う情は深く、「天なるかな」という叫びに兄としての真情が披瀝されている。次に「二女墓誌」を見よう。

> 二女は慶老と曰い、吾が妻晁氏の出なり。生まれて三歳にして夭す。…是の時に方(あた)

[10] 以下、曾鞏の詩文引用はすべて陳杏珍，晁繼周點校『曾鞏集』（北京：中華書局出版　一九八四年刊）による。

り、吾が妻晁氏の病已に革(あらた)む。慶老の疾未だ作らざるの夕、其の母を省し、勉慰すること成人の如し。中夕にして疾作り、遂に救えず。…實に治平三年九月甲寅なり。是の時、余方に景德寺に鎮宿せられ、國子監の進士を試み、其の疾を視、其の死に臨むを得ざるなり。二女は生れて予の窮多故に値い、其の不幸にして又た夭して以て死す。所謂命の非なるものならんや。

〔二女、曰慶老、吾妻晁氏出也。生三歳而夭、…方是時、吾妻晁氏病己革、慶老疾未作之夕、省其母、勉慰如成人、中夕而疾作、遂不救。…實治平三年九月甲寅。是時、余方鎖宿景德寺、試國子監進士、不得視其疾、臨其死也。二女生而值予之窮多故、其不幸又夭以死、所謂命非邪？〕

全文は回想のスタイルであり、具体的なディテールを通して二女が夭折する経過を詳細に描き、父としての責任を果たせなかった口惜しさがこめられている。

墓誌銘はある種の応用のきく文体であり、固定した内容と形式を持っているため、定型化・パターン化に陥りやすく、社交辞令化しやすいとされている。しかし、上にあげたいくつかの例から見ると、曾鞏は事実に基づいて記録する、言わば史学の方法で墓誌銘を書くことができたと了解される。この点については以下に材料を付け加え実証していきたいと思う。彼の女性墓誌銘に織り込まれているのは、彼が強調したいと考え、十分称揚に値すると判断していた女性の美徳であり、こういった美徳を具える妻こそ曾鞏の想定した女性の模範であったに違いない。小論では、「婦道を尽くす妻」「夫に従う妻」「夫を助ける妻」「才智を具える妻」という四つの角度から曾鞏の視野にとらえられた妻のイメージを考察してみたいと思う。

第三章　曾鞏の女性墓誌銘における妻のイメージ

曾鞏は比較的平穏な生涯[11]を送った。郷里で晴耕雨読の生活を送った後、嘉祐二年（1057）三十九歳で進士に登第し、太平州（現在の安徽省當塗県）の司法参軍、館閣校勘、集賢校理、各地の知州、中書舎人などの官職を歴任した。彼の一生は順調で、大きな政治の波風は受けたことがなく、長期にわたり古典籍の整理、校訂に従事したこともあり、地に足のついた純正なスタイルの文章が生み出された。このような文体は彼の女性墓誌銘にも反映されている。

[11] 附録の拙作曾鞏略年譜を参照。

（一）婦道を尽くす妻

曾鞏の思想は伝統的な儒家の観念が残存しており、彼の散文は「文は以て道を載せる」という古代の散文を継承発展させたものであったことは言うまでもない。曾鞏の女性墓誌銘で先ず目につくのは、婦道を遵守する女性への賞賛である。彼は女性が婦道を尽くすべきであると心から信じていた。「婦道」とは貞節、孝行、従順、謹直を指す。彼の作「金華縣君曾氏墓誌銘」は次のように述べる。

> 夫人は王氏に嫁し、侍御史諱は平の妻と爲る。姓は曾氏。…既に嫁しては、夫家は貧しく、姑を養いて婦道を盡くす。其の夫を輔けては妻道を盡くす。夫の死するや、潁に寓食し、勤儉を以て日を積みて其の家を大にし、誘教して倦まざるを以て其の子を成らしむ。又た母道を盡くすと謂う可きなり。
> 〔夫人嫁王氏、爲侍禦史諱平妻、姓曾氏、…既嫁、夫家貧、養姑盡婦道。輔其夫盡妻道。夫死、寓食于潁、以勤儉積日大其家、以誘教不倦成其子、又可謂盡母道也。〕

貧しかった夫の実家で苦労を厭わずに努力を続け、「婦道」「妻道」「母道」を尽くし、夫の死後も倹約を旨として家産を大きくし、子女を立派に育て上げた曾氏を曾鞏は褒め称える。「試秘書省校書郎李君妻太原王氏墓誌銘」でも、「夫人の姓は王氏、太原の人。…其の行は仁孝慈恕。始めは女と爲り、中には婦となり、終わりには母と爲り、其の道を盡くさざる無し」〔夫人姓王氏、太原人。…其行仁孝慈恕、始于爲女、中于爲婦、終于爲母、無不盡其道。〕と言い、「金華縣君曾氏墓誌銘」と同じ筆法で王氏を称揚している。もう一つ例をあげよう。彼が母方のおじの妻沈氏のために書いた「沈氏夫人墓志銘」である。

> 夫人姓は沈氏、其の先は越の會稽に家す。曾祖仁諒、海州の朐山に令たり、家を和州の歴陽に徙し、故に今は歴陽の人と爲る。…夫人は人と爲り柔閑靜專、父母に事えては子道を盡くし、姑の長興縣太君賈氏に事えては婦道を盡くし、夫に事えては妻道を盡くす。母と爲りて内外の屬人と接するに及びては、一（ひと）えに皆其の道を盡くす。故に其の處たるや、其の家に愛され、其の嫁するや、夫の屬人上下遠近皆これを愛す。其の歿するや、これを哭する者皆哀しむ。
> 〔夫人姓沈氏、其先家于越之會稽。曾祖仁諒、令海州之朐山、徒家于和州曆陽、故今爲曆陽人。…夫人爲人柔閑靜專、事父母盡子道、事姑長興縣太君賈氏盡婦道、事夫盡妻道、爲母及與内外屬人接、一皆盡其道。故其處也、愛于其家、其嫁也、夫之屬人上下遠近皆愛之、而其歿也、哭之者皆哀。〕

沈氏夫人は「姑の長興縣太君賈氏に事えては婦道を盡くし、夫に事えては妻道を盡く」し、母親として家庭内外の親族と接する時も「一（ひと）えに皆其の道を盡くした」

とあって、貞節、孝行、従順、謹直などの女性の美徳をすべて具えていた。女性は日常生活において執事頭の役割を果たしており、日常の事務処理は彼女たちの基本的な職責であった。これは彼の女性墓誌銘においてあちこちに見られるが、いくつか例をあげれば、「其の力を盡くし、飲食衣服を治(ととの)えて以て進め、喪に及びては、能く其の哀しみを盡くす、皆其の夫の志の如し」〔盡其力、治飲食、衣服以進、及喪、能盡其哀、皆如其夫之志。〕(「天長縣君黄氏墓誌銘」)、「父母の衣食服御は、これを待ちて後に安んず。既に嫁しては、惇行孝謹にして、其の家に宜し」〔父母衣食服禦、待之而後安。既嫁、恭行孝謹、宜于其家。〕(「壽昌縣太君許氏墓誌銘」)などである。これらの例から分かる通り、曾鞏は家庭における妻の役割を十分に認識していたようである。曾鞏は先ず何にもまして、妻は衣服を仕上げ、食事を整えといった多くの家庭の事務を負担せねばならないと考え、「飲食衣服を治めて以て進む」、「婦人法度の事を知り、針縷刀尺に巧みなり」のように、家事に長じた女性を賞賛している。次に曾鞏があげるのは、質素な生活である。彼は質素な生活を堅持する女性を讃える一方で、近頃の女性は「婦人室家に居りて自り、已に相い與に車服を矜り、首飾を耀かし、輩聚歡言するに侈靡を以て」〔居室家、已相與矜車服、耀首飾、輩聚歡言以侈靡〕(曾鞏「説内治」)すると非難している。経済状態が悪い家庭にあって、質素な暮らしで家計を支える女性を曾鞏は常にたたえる。先にあげた例を引けば、曾氏は「勤儉を以て日を積みて其の家を大」〔以勤儉積日大其家〕にしたし、王氏に嫁した妹は「王氏は故(もと)もと貧しく、垢衣菲食なるも未だ嘗て歉(あきたら)らずと爲さず」〔王氏故貧、垢衣菲食、未嘗以爲歉〕(「仙源縣君曾氏墓志銘」)であったという。彼女らを曾鞏は強く推奨している。

さらに一歩進んで、女性は家族の構成員間の仲を取り持つ役割も担っていた。例えば薛氏は夫の家に嫁いでからというもの、「能く其の屬人を和」〔能和其屬人〕(「旌德縣太君薛氏墓誌銘」)したし、曾鞏の妻の祖母は「夫人の人と爲りは仁厚莊靜にして、女爲りて自り既に嫁するに及び、内外・尊卑・長幼・親疎の際に處りては、禮に當たりてこれを恩稱せざる無し。」〔夫人爲人、仁厚莊靜、自爲女及既嫁、處内外、尊卑、長幼、親疏之際、無不當于禮、而恩稱之〕(「壽安縣君張氏墓志銘」)であったと激賞している。

最後にあげねばならないのは孝道である。儒家の伝統的な観念において、数ある徳行のうち、孝行が筆頭の地位に在ることは言うまでもなかろう。曾鞏の墓誌銘の中でも、婦道の一つの要素である孝行があちこちで取り上げられている。女性の孝

行は、生みの親に孝養を尽くす行為より、夫に代わって嫁ぎ先の両親に孝養を尽くす行為の方がより大きな称賛を勝ち得る場合が多い。孝道は男女両性にとって一様に重要ではあるが、夫の年老いた両親の世話をする任務の多くを担ったのは女性であった。女性が夫に嫁いでからは、夫の妻になるだけでなく、相手の家族の一員となることの方がさらに重要であった。妻は夫の家庭において、すべての家族構成員及び友人との関係を引受ねばならなかった。先に述べたとおり、夫の両親、夫の兄弟姉妹、兄の嫁、弟の嫁などとの関係を調整するのが彼女たちの役割だったのだ。曾鞏は女性墓誌銘の中で、「父母に事えて其の教えに違わず、舅姑に事えて其の志に違わず、夫に事えては順にして以て其の善を相くる有り、子より内外の屬人に至るを遇するに、一えに恩を以てして禮に違わず」〔事父母不違其教、事舅姑不違其志、事夫順而有以相其善、遇子至于内外屬人、一以恩而不違于禮〕（「永安縣君李氏墓誌銘」）と李氏を讃え、「門を闔じて姑に事え、能く其の孝を盡くす」〔闔門事姑、能盡其孝〕（「池州貴池縣主簿沈君夫人元氏墓誌銘」）と沈君夫人元氏を誉めそやし、「能く吾が志に順う」〔能順吾志〕（「知處州青田縣朱君夫人戴氏墓誌銘」）と、夫の両親が嫁の戴氏を自慢した言葉を引用し、「父母姑舅を養いて皆至孝なり」〔養父母姑舅皆至孝〕、「其の内外の屬に於けるや皆恩意を盡くす」〔其于内外屬、親疏皆盡恩意〕（「鄆州平陰縣主簿關君妻曾氏墓表」）と自ら孝養を尽くし、家族間の関係をよく調整した妹を賞賛している。

墓誌銘のみならず、彼が女性のために書いた詩文の中にも、曾鞏がこれらの婦徳を提唱した作品を見出すことができる。例えば「亡妻晁氏を祭る文」は冒頭から「子には仁孝の行、勤儉の德有り」〔子有仁孝之行、勤儉之德〕で始まる。彼は「言に疵悔無く、動は衡規に應ず」〔言無疵悔（缺點過失）、動應衡規〕と妻が婦道を守ったことを述べるだけでなく、「衣に穿弊有り、珥に光輝無し」〔衣有穿弊、珥無光輝〕と慎ましい生活を維持し、「親疏は悅慕し、稚艾は嗟咨す」〔親疏悅慕、稚艾嗟咨〕と家庭を睦まじい雰囲気に包み、「姑に事うるの禮、左右違うこと無し」〔事姑之禮、左右無違〕と孝道を守ったことを賞賛しており、「婦道を尽くす妻」という観念があますところなく現れている。

先にあげた「説内治」の中の当世の女性を非難したくだり、「舅姑の養を顧みず、相い悅ばざれば則ち犯して相い直す。…其の舅姑に於いてすら然る爾、況や夫の昆弟、相い與に等夷爲る者をや」〔不顧舅姑之養、不相悅則犯而相直。…其于舅姑然爾、而況于夫之昆弟、相與爲等夷者乎〕を併せ読む時、彼が孝道をいかに重視していた

かその一斑を見ることができる。

（二）夫に従う妻

拙論「梅堯臣の妻に対する観念」[12]に於いて私は梅堯臣が妻の婦徳をたびたび賛美していたのを確認した。その一方で、彼らは互いに尊重しあい、親友と良友を兼ねた夫婦関係が成立していた。曾鞏の場合はどうであろうか？彼はそのような夫婦関係を認めていたであろうか？妹婿の母のために書いた「夫人周氏墓誌銘」で彼は書く。

> 夫人諱は琬、字は東玉。…既に嫁しては舅姑無く、夫に順い子を慈しみ、饋祀を嚴にし、屬人を諧（やわら）ぐ。其の素學を行いて、皆儀矩に應ず。
> 〔夫人諱琬、字東玉…既嫁、無舅姑、順夫慈子、嚴饋祀、諧屬人、行其素學、皆應儀矩。〕

彼がここで触れているのは「夫に順い子を慈しむ」婦徳である。さらに岳父の姉のために書いた「永安縣君李氏墓誌銘」でも次のように述べる。

> 夫人の姓は李氏、其の先は燕の人なり。…夫人は駱氏に嫁し、駱氏もまた許州の長葛に家す。其の夫の諱は與京なり。…夫人は仁孝慈恕にして、言動は必ず義理を擇ぶ。父母に事えては其の教えに違わず、舅姑に事えては其の志に違わず、夫に事えては順にして其の善を相くる有り。子より内外の屬人に至るを遇するに、一えに恩を以てして禮に違わず。
> 〔夫人姓李氏、其先燕人…夫人嫁駱氏、駱氏亦家許州之長葛。其夫諱與京…夫人仁孝慈恕、言動必擇義理。事父母不違其教、事舅姑不違其志、事夫順而有以相其善、遇子至于内外屬人、一以恩而不違于禮。〕

ここでも父母や舅姑に孝養をつくすほかに、「夫に事えては順にして其の善を相くる有り」と言っている。九十歳の天寿を全うした謝氏のために書いた「永安縣君謝氏墓誌銘」でも同様に「婦順」が強調されている。

> 宋の故衞尉寺丞王公諱は用之の夫人、尚書都官員外郎、贈尚書工部郎中諱は益の母、姓は謝氏、永安縣君に累封せらる。…余既に夫人の諸孫と遊び、嘗て堂上に拜するを得たり。其の色は和（なご）み、其の容は謹しめるを見、其の言は儉にして勤なるを聞く。退きては婦（つま）爲るや順、母爲るや慈なるを聞き、其の福禄を享ける所以を知る、

[12]『人間社會學研究集錄』(2011 年 第 6 號)

其れ宜なるかな。
〔寺丞王公諱用之之夫人、尚書都官員外郎、贈尚書工部郎中諱益之母、姓謝氏、累封永安縣君。…余既與夫人之諸孫遊、而嘗得拜于堂上、見其色和、其容謹、聞其言儉而勤、退而聞其爲婦順、爲母慈、知其所以享其福祿者、其宜也已。〕

曾鞏が墓誌銘で推奨する理想の夫婦関係の中心概念は「妻順にして夫に従う」というものである。「既に嫁しては行に悖り色に勝り、男をして女に事えしめ、夫は婦に屈す」〔既嫁則悖于行而勝于色、使男事女、夫屈于婦、不顧舅姑之養、不相悅則犯而相直〕（「説内治」）のような近来の女性の風潮に極力反対し、「吾れ未だ其の可なるを見ざるなり」〔吾未見其可也〕（「説内治」）と言明している。また彼は「古語に曰く、福の興るや、室家に始まらざる莫し。道の衰うるや閫内に始まらざる莫しと。豈に風俗の厚薄、人道の邪正、壽夭の原は此に繫(かか)るに非ざらんか？」〔古語曰：福之興、莫不本乎室家、道之衰、莫不始乎閫内。豈非風俗之厚薄、人道之邪正、壽夭之原系于此欤？〕（「説内治」）と指摘している。儒教思想を基礎とする曾鞏は、女性の墓誌銘においても道徳の普及、人倫の擁護を図っていると言えよう。同時に「修身」「斉家」といった目標の達成も墓誌銘に託されているのである。

しかしその一方で曾鞏は「亡妻晁氏を祭る文」でこうも述べている。

子には仁孝の行、勤儉の德有り。宏裕にして端莊、聰明にして靜黙なり。窮達にも能く安んじ、死生にも惑わず、以て古の淑人に齊しく、世の常則爲るべし。…嗚呼哀しいかな。父は賢女を失い、姑は孝婦を亡い、子は嚴師を喪い、吾は益友を虧く。
〔子有仁孝之行、勤儉之德。宏裕端莊、聰明靜默。窮達能安、死生不惑。可以齊古淑人、爲世常則。…嗚呼哀哉！父失賢女、姑亡孝婦、子喪嚴師、吾虧益友。〕

曾鞏は「妻は順にして夫に従う」べしと提唱すると同時に、妻は自分の益友であったとも述べる。さらにこの祭文を味読すると、彼の筆下、その妻は道徳的な模範となっていた。曾鞏は夫婦間の愛情から生ずる悲しみに加え、「父は賢女を失い、姑は孝婦を亡い、子は嚴師を喪い、吾は益友を虧く」〔父失賢女、姑亡孝婦、子喪嚴師、吾虧益友〕という家族全体の悲しみも書きこんでいる。晁氏が彼に残した最も忘れ難い思い出は、彼女が貧困に甘んじ、勤勉でよく家計を維持した点であり、さらに「言は疵悔無く、動は衡規に應ず」〔言無疵悔、動應衡規〕（「亡妻晁氏を祭る文」）という人と為りであった。彼の悼亡詩「秋夜」で彼は「平生肺腑の友、一訣　空床を餘す」〔平生肺腑友、一訣余空床〕と書いており、妻が心の奥底では気の置けない親友であったことが見て取れる。

曾鞏の夫婦関係には、「妻は順にして夫に従う」という準則のほかに、益友という価値基準も存在したようである。この価値基準の主な特徴は、夫婦はモラルの面で互いに助け合うだけでなく、知的な面でも互いに啓発し合い、補完し合うというものであった。

（三）夫を助ける妻

以上にあげた曾鞏の女性墓誌銘の例からも曾鞏が「婦道を尽くす妻」、「従順で夫に従う妻」という視点だけでなく、「夫を助ける妻」という彼独自の視点を持っていたことに我々は着目せざるを得ない。例えば自分の妹のために書いた「江都縣主簿王君夫人曾氏墓志」に言う、

> 試校書郎揚州江都縣主簿王無咎の妻曾氏、…以て王氏に歸す。王氏の家は故より貧しく、曾氏は冢婦と爲る。而して其の姑は蚤世し、獨り家政に任ず。能く力を精くし、躬ずから勞苦し、細微を理め、先後緩急に隨いて樽節と爲し、各の條序有り。事の時節に有るに、朝夕共に賓祭奉養し、其の門内を撫し、皆時とする所を失わず、恭嚴誠順を以て、能く其の屬人を得たり。…其の夫歎じて曰く、我れ能く意を一にして、自ら官學に肆ままにし、私を以て其の志を累わさざるは、曾氏我を助くるなりと。…
>
> 〔試校書郎、揚州江都縣主簿王無咎妻曾氏、…以歸王氏。王氏家故貧、曾氏爲冢婦、而其姑蚤世、獨任家政、能精力、躬勞苦、理細微、隨先後緩急爲樽節、各有條序。有事于時節、朝夕共賓祭奉養、撫其門内、皆不失所時、將以恭嚴誠順、能得其屬人。…其夫歎曰：我能一意自肆于官學、不以私累其志、曾氏助我也。…〕

家庭の内外にわたって整然と物事を処理できる有能な妻を持てば、夫は後顧の憂いなく治国平天下に精を出せるというものであり、夫は妻を「我れ能く意を一にして、自ら官學に肆ままにす、私を以て其の志を累わさざるは、曾氏我を助けるなりと」〔我能一意自肆于官學、不以私累其志、曾氏助我也〕と絶賛する。同様に、北宋の著名な科学者であった沈括の母のために書いた「壽昌縣太君許氏墓誌銘」の中で、はっきりと述べている。

> 夫人許氏は蘇州呉縣の人なり。…父母の衣食服御は、これを待ちて後に安んず。既に嫁しては、惇行孝謹にして、其の家に宜し。其の夫は吏と爲りて名有り、夫人は實にこれを相くと稱す。
>
> 〔夫人許氏、蘇州吳縣人。…父母衣食服禦、待之而後安。既嫁、惇行孝謹、宜于其家。其夫爲吏有名、稱夫人實相之　〕

この二篇の墓誌銘では、どちらもその夫が正面から妻の役割を認め、賢妻が自分

を助けてくれたと率直に告白している。さらに家庭の外で職務に専念し、名声を得たのは妻の功績もあると考えており、このような例は稀であると言えよう。
さらに、「故太常博士呉君墓誌銘」では、自分の母のおばである朱氏に触れ、以下のように述べる。

> 君の諱は祥、字某、姓は呉氏、宋に事えて太常博士となる。…妻は朱氏、某縣君、余の姨なり、君に助有り。
> 〔君諱祥、字某、姓吳氏、事宋爲太常博士。…妻朱氏、某縣君、余姨也、有助于君。〕

やはり彼の妹同様「君（夫）に助有った」妻を描いている。もう一つ、彼が戴氏のために書いた、「知處州青田縣朱君夫人戴氏墓誌銘」でも、彼はそれに触れている。

> 夫人の考、諱は奎、徐氏の女を娶り、夫婦皆善行有りて、其の鄉に聞こゆ。夫人は教えを始笄に受け、事に既嫁に從い、少くして行を身に修め、老いては教えを家に行う。故に父母は、吾が憂いを遺さずと曰い、舅姑は、能く吾が志に順うと曰う。夫は其の助けを受け、子は賴りて以て成る。
> 〔夫人之考諱奎、娶徐氏女、夫婦皆有善行、聞于其鄉。夫人受教于始笄、從事于既嫁、少而行修于身、老而教行于家。故父母曰“不遺吾憂”、舅姑曰「能順吾志」。夫受其助、子賴以成〕

妹婿の母のために書いた「福昌縣君傅氏墓誌銘」にも次のような記述がある。

> 福昌君の家に在るや、父母の器異する所と爲る。既に嫁しては夫屬退言無し、布衣惡食、身ずから細微を治（ととの）う。…其の子を教うるや慈にして以て肅たり。關公進士より起こり、郎と爲り、池台兩州と爲り、年八十にして以て歸りて曰く、吾少くして力を官に盡くすを得、老いて自ら家に休むを得、家事を以て吾が志を累らわさざるものは、夫人有るを以てなり。
> 〔福昌君在家、爲父母所器異。既嫁而夫屬無退言、布衣惡食、身治細微。…其教子慈以肅。關公起進士、爲郎、爲池、台兩州、年八十以歸、曰「吾少得盡力于官、而老得自休于家、不以家事累吾志者、以有夫人也。」〕

曾鞏の筆下のこれらの女性たちは、「内助」の行為により、「夫を助け子を教える」役割を演じていたことが見て取れるのである。曾鞏は儒家思想に基づき、「今の敝を放ち、古の制を考え」〔放今之敝、考古之制〕てこそ「易に曰く、家を正して天下定まる」〔「易」曰：正家而天下定〕（「説内治」）という理想が達成できると考えている。

（四）才能あふれる妻

以上の三点において、我々は曾鞏が抱いていた典型的な儒家思想の一面を観察することができた。しかし、彼の女性墓誌銘にもう一つ大きな、異彩を放つ特徴を見ることができる。それは女性の才筆に対する称賛である。例えば、「壽昌縣太君許氏墓誌銘」で、

> 夫人許氏、蘇州呉縣の人なり。考は仲容、太子洗馬なり。兄の洞は能文で名あり、國史に見ゆ。夫人は書を読みて大意を知り、其の兄の爲る所の文は、輒ち能く誦を成す。
> 〔夫人許氏、蘇州呉縣人。考仲容、太子洗馬。兄洞名能文、見國史。夫人讀書知大意、其兄所爲文、輒能成誦。〕

のように、許氏のすぐれた記憶力、読書力を讃える。また亡妻晁氏のために書いた「亡妻宜興縣君文柔晁氏墓誌銘」でも、

> 文柔姓は晁氏、諱は德儀、字は文柔、年十有八にして余に嫁す。…人と爲りは聰明、事に於いて迎見すれば立ちどころに解し、其の理を盡くさざる無し。其の概の見る可き者此の如し。
> 〔文柔姓晁氏、諱德儀、字文柔、年十有八嫁余…爲人聰明、于事迎見立解、無不盡其理、其概可見者如此。蓋天畀之德而夭其年、遺以相余而奪之蚤。余不知其所以、而又不自知其哭之之慟也〕

と述べ、「人と爲りは聰明、事に於いて迎見すれば立ちどころに解し、其の理を盡くさざる無し」と率直に誉めている。「賢妻」に「才智」が加わっているのだから、より効果的に夫を助け、より合理的に家庭を切り盛りできるわけである。曾鞏の「夫人周氏墓誌銘」にも同様な女性像を見出すことができる。

> 夫人の諱は琬、字は東玉、姓は周氏、父兄は皆明經に舉げらる。夫人は獨り圖史を喜び、好みて文章を爲り、日夜倦まざること學士大夫の如く、其の舅邢起に從いて詩を爲るを學ぶ。…詩七百篇有り、其の文は靜にして正しく、柔にして屈せず、言に約にして禮に謹しめる者なり。…茲の道廢れ、夫人の學の若きは天性より出で、言行は法度を失わず、是れ賢とすべきなり。
> 〔夫人諱琬、字東玉、姓周氏、父兄皆舉明經。夫人獨喜圖史、好爲文章、日夜不倦、如學士大夫、從其舅邢起學爲詩。…有詩七百篇、其文靜而正、柔而不屈、約于言而謹于禮者也。…茲道廢、若夫人之學出于天性、而言行不失法度、是可賢也已。〕

周氏はインテリ女性と言えよう。周氏は書物を愛しただけでなく、創作もこなした。彼女が用いたのは平静純正で、柔和だが卑屈にならない、簡潔で礼法を守った

表現であり、そのような作品が七百篇もあったのである。宋代の女性墓誌銘にあって、このような描写はそう多くない。妹の墓誌銘「江都縣主簿王君夫人墓誌」にも次のような記述がある。

> 試校書郎揚州江都縣主簿王無咎の妻曾氏、建昌の南豐の人にして、先君博士の第二女なり。孝愛聰明にして、能く書を讀み古今を言う。婦人法度の事を知り、針縷刀尺に巧みにして、經手は皆絶倫たり。
> 〔試校書郎、揚州江都縣主簿王無咎妻曾氏、建昌南豐人、先君博士第二女也。孝愛聰明、能讀書言古今、知婦人法度之事、巧針縷刀尺、經手皆絶倫。〕

ここでも「孝愛聰明にして、能く書を讀み古今を言う」と妹が讃えられている。これらの聡明で才知に富み、「古今を言う」妻たちは、「賢妻」の役柄を演じるだけでなく、「良母」としての役割を担っていたであろうことは容易に想像がつく。曾鞏は女性墓誌銘において、到る処で女性が備えるべき子女の教育能力に言及し、母親は子女を最初に教育する、啓蒙の師の立場にある人間であるとして、その成長にとって重要な役割を果たすと強調している。司馬光が«家範»で、「人の母爲る者は、慈ならざるを患えず、愛を知りて教えを知らざるを患うるなり」〔為人母者、不患不慈、患於知愛而不知教也〕[13]と言う通りである。宋代の人々はこの母親としての責任を非常に重視していた。「壽安縣君錢氏墓誌銘」は次のように述べる。

> 夫人姓は錢氏。…夫人は色莊にして氣仁、言動は繩墨を失わず、族人の長幼親疎の間に居りて其の宜しきを盡くす。夫に事えては其の忠を成さしめ、子を教えては其の孝を成さしむるは、是れ皆傳うべき者なり。
> 〔夫人姓錢氏…夫人色莊氣仁、言動不失繩墨、居族人長幼親疏間盡其宜、事夫能成其忠、教子能成其孝、是皆可傳者也。〕

その他先に取り上げた「壽昌縣太君許氏墓誌銘」では沈括の母で許氏が「夫に益有り、子に迪（みちびき）有り」〔有益於夫、有迪於子〕であり、「子は披と曰う、國子博士たり、吏材有り。括と曰う、揚州司理參軍、館閣校勘たり、文學有り。其の幼きとき、皆夫人の自ら教うる所なり」〔子曰披、國子博士、有吏材。曰括、揚州司理參軍、館閣校勘、有文學。其幼皆夫人所自教〕であった。また王氏は、「人と爲りは明識強記にして、圖籍を博覧す、子孫は學を受かり、皆自ら先生と爲」〔爲人明識強記、博覽

---

[13] 司馬光『家範巻三・父母』(『影印文淵閣四庫全書』第六九六冊所収　台湾商務印書館一九八三～一九八六年刊　) 六六九頁。

圖籍、子孫受學、皆自爲先生〕（試秘書省校書郎李君妻太原王氏墓誌銘）ったのであった。曾鞏が女性のために書いた二十五篇の墓誌銘の中で、母親となった女性の殆んどすべてが子女をきちんと教育し得たという理由で称賛されている。女性は子女の教育に対し大きな責任を負っていたため、曾鞏はきちんとした教養を身に着け、才智を具え、子供の教育に熱心な女性を激賞したのであった。

第四章　「説内治」について

曾鞏の女性墓誌銘に現れている女性観を、これまでにたびたび引用した「説内治」を材料として概括してみよう。以下にその全文をあげる。

（1）古えの公侯卿大夫士は、惟だ外に淑（よ）きを行うのみに非ず、蓋し亦た閨門の助有るなり。詩の二南を考うるに、后夫人の事を言い、婦人の夫に於けるや、酒食を主どり、巾櫛を奉るのみならず、固より實に以てこれを輔佐する有るを明らかにするなり。先王の制、閨門の内、姆媒師傅、車服珮玉、升降進退、起居奉養、皆條法有り。婦人は少くして習い長じてこれに安んず。故に身を禔（ただ）し家を正して過有ること莫し。

（2）近世は然らず、婦人室家に居りて自り、已に相い與に車服を矜り、首飾を耀かし、輩聚歡言するに侈靡を以てし、悍妒大故（はなは）だし。力を閥貴に負う者は、未だ人と成らざるに嫁娶す。既に嫁しては則ち行に悖り色に勝り、男をして女に事えしめ、夫は婦に屈し、舅姑の養を顧みず、相い悦ばざれば則ち犯して相い直す。その良人未だ嘗て能く以て婦を責め、又た反って其の親を望（せ）めざる能わずんばあらざる者幾だ少なきなり。其の舅姑に於いてすら然る爾、況や夫の昆弟、相い與に等夷爲る者をや。祀祭賓客の禮有るや、自らは具えを爲さず、人をしてこれを爲さしむ。浣濯の服、蠶桑の務、古天子の后禮安にして常に行いし者なり。而して今の庶人孽妾これを言うを羞ず。姆媒師傅、佩玉儀節、蘋蘩を采り、棗脩を贄るの事、則ち族（あつま）りて笑いて曰く、我れ豈に是を能くせん。是れ我れの宜しきに非ざるなりと。一切禮に悖り、相い驕驁浮僻に趨るのみにして、其の夫を輔佐する所以を求むるも、可ならんか。

（3）噫、古の士庶人の妻は禮義を秉るを知り、訓導に服す。而るに今の王公大臣の匹は反って能わず、怪しむべきなり。翦縷の工ならざる、刻畫の善しからざれば、則ち恥じてこれを學ぶ。大倫大法の修めざるに至りては、瞗然としてこれに安んじ、吾れ未だ其の可なるを見ざるなり。古語に曰く、福の興るや、室家に本づかざる莫し、道の衰うるや、閫内に始まらざる莫しと。豈に風俗の厚薄、人道の邪正、壽夭の原はこれに繫るに非ざらんか。其れ以て忽然として恣に流れて返らざる可きや。曰く、これを如何すれば返す可きやと。曰く、今の敝を放ち、古の制を考え、これを公卿大夫の家に先んずれば、茲れ可なりと。易に曰く、家を正して天下定まると。吾が説は疏ならんや。

〔（1）古者公侯卿大夫士、非惟外行淑也、蓋亦有閨門之助焉。考詩之二南、言後夫人之事、明婦人之于夫也、不獨主酒食、奉巾栉而已、固實有以輔佐之也。先王之

制、閨門之内、姆保師傅、車服珮玉、升降進退、起居奉養、皆有條法。婦人少習而長安焉、故禔是身正家莫有過也。

（2）近世不然、婦人自居室家、已相與矜車服、耀首飾、輩聚歡言以侈靡、悍妒大故、負力閥貴者、未成人而嫁娶、既嫁則悖于行而勝于色、使男事女、夫屈于婦、不顧舅姑之養、不相悅則犯而相直、其良人未嘗能以責婦、又不能不反望其親者、幾少矣。其于舅姑然爾、而況于夫之昆弟、相與爲等夷者乎？有祀祭、賓客之禮、不自爲具、而使人爲之。浣濯之服、蠶桑之務、古天子後禮安而常行者也、而今之庶人孽妾羞言之。姆保師傅、佩玉儀節、采蘋蘩、贄棗修之事、則族而笑曰、我豈能是？是非我宜也。一切悖禮、相趨于驕奢淫僻而已、求其所以輔佐夫、可乎？

（3）噫！古士庶人之妻、知秉禮義、服訓導、而今王公大人之匹反不能、可怪也。剪縷之不工、刻畫之不善、則恥而學焉、至大倫大法之不修、則瞷然安之、吾未見其可也。古語曰、福之興、莫不本乎室家、道之衰、莫不始乎閫内。豈非風俗之厚薄、人道之邪正、壽夭之原系于此欤？其可以忽然流咨而不返欤？曰、如之何而可返？曰、放今之敝、考古之制、而先之于公卿大夫之家、茲可也。易曰、正家而天下定。吾說豈疏乎？〕

この文章では、曾鞏は『詩経』の「周南」と「召南」を援用して、古代の妻たちが夫の飲食や日常生活を支えるのみならず、夫の輔佐を行った事を指摘している。これらの女性たちは、「閨門の内、姆媒師傅、車服珮玉、升降進退、起居奉養、皆條法有り」「少くして習い長じてこれに安んず。故に身を禔(ただ)し家を正して過有ること莫し」とあるように、幼い頃から正統的な儒教の礼儀作法の教育を受け、自覚して儒教の生活規範を守り、家庭内の秩序を維持していた。曾鞏は儒家の礼儀作法を守り、家事を整然と処理し、同時に夫を輔佐できる妻を公然と賞賛している。

この文章の第二段落で、曾鞏は「近世」の女性たちの婦道に違う行動をあれこれあげつらっている。その一、曾鞏は「婦道を盡くす」という道理を理解しない女性がいると批判する。「室家に居りて自り、已に相い與に車服を矜り、首飾を耀かし、輩聚歡言するに侈靡を以て」すと言うように、彼女らは互いに贅沢を競い、質素倹約に努めない。その二、「妻は夫に從う」と言う道理を理解していないという批判。「未だ人と成らざるに嫁娶す。既に嫁しては則ち行に悖り色に勝り、男をして女に事えしめ、夫は婦に屈」すと文中に言うように、彼女たちは夫に従い妻の道を尽くすどころか、反対に夫を妻に迎合させ、妻に服従させるのである。その三、目上の人々に仕えず、孝養を尽くそうとしないという非難。「百善は孝を以て先と爲す」〔百善孝為先〕という諺があるが、それに反し、大家庭に生きる女性として、目上の人々に対して「舅姑の養を顧みず、相い悦ばざれば則ち犯して相い直」すという態度をとっているのでは、同輩である夫の兄弟姉妹に対してどのような態度をとるかは想像に難くない。「其の舅姑に於いてすら然る爾、況や夫の昆弟、相い與に等夷爲る者

をや」と曾鞏が書いているとおりである。その四、曾鞏は妻たちが自分の手で家事をこなさないという悪習を非難する。「古天子の后禮安にして常に行いし者なり。而して今の庶人孽妾これを言うを羞ず」と彼が言う通り、古代の皇后たちが自ら従事した養蚕や祭祀などの項目を、今の女性たちは「族(あつま)りて笑いて曰く、我れ豈に是を能くせん。是れ我れの宜しきに非」ずと嘲笑する。曾鞏の下した結論は、「一切禮に悖り、相い驕驁浮僻に趨るのみ、其の夫を輔佐する所以を求むるも、可ならんか」であり、「近世」の女性たちの行動に相当強い違和感を持っていたことがわかる。

『曾鞏集』の前言に「曾鞏の作品は「古今の治亂得失、是非成敗、人の賢不肖、以て當世の務めを彌綸するを致す。損益を勘酌し、必ず經に本づく」〔言古今治亂得失、是非成敗、人賢不肖、以致彌綸當世之務。斟酌損益、比本於今〕(曾鞏の文「曾鞏行状」)であり、儒家の道を用いて「衰うるを扶(たす)け缺けたるを救」〔扶衰救缺〕(曾鞏の文「上歐陽學士第一書」)おうとし、古代の聖王の意に沿うという前提の下、法制度の改革を試みた」[14]と言うように、曾鞏は純粋な儒家であり、その経学思想は教化を中核としており、この基礎の上に改革を試みたのである。梅堯臣とは一見同じように見えて差異が存在している。

第五章　曾鞏と梅堯臣の妻に対する観念の比較

「唐宋八大家」の一人である曾鞏と、宋詩の「開山祖師」である梅堯臣(1002－1060)は年齢の差が17歳あったが、伝統の思想を継承していた点ではよく似ている。梅堯臣の妻に対する観念については拙文「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」を参照されたい。

先ず、彼らの共通点であるが、それは妻の婦徳を高く評価している点である。それは、賢明な妻、厳しくかつ慈しみ深くもある母、夫の両親に孝養を尽くす嫁についての賞賛であるが、これは同時代の文人に共通する特徴なので、ここでは詳しくは述べない。ここで私が取り上げたいのは、自分の手を動かして家事を行う賢妻のイメージである。梅堯臣の詠妻詩に、「単舟　匹婦　更に婢無く、朝餐　毎に愧(は)ず婦親(つまみず)から炊(かし)ぐを」〔單舟匹婦更無婢、朝餐毎愧婦親炊〕(「途中寄上尚書晏相公二十

[14] 陳杏珍、晁繼周點校『曾鞏集』(北京：中華書局出版　一九八四年刊)第二頁。

韻」)、「是の時新歳に値い、慶拜は乃ち唯だ内のみ。草率に盤餐を具え、約略に粉黛を施す」〔是時値新歳、慶拜乃唯内。草率具盤餐、約略施粉黛〕(「元日」)、「愚妻方に浴を罷め、飯を供して倉卒に愧ず。凍婢　煎和に昧く、親調して鬅を忘る」〔愚妻方罷沐、供飯愧倉卒。凍婢昧煎和、親調首忘鬅〕(「奉和子華持國玉汝來飲西軒」)、などの描写が見られる。曾鞏も当時の女性が「浣濯の服、蠶桑の務、古天子の后禮安に常に行いし者なり。而して今の庶人孽妾これを言うを羞ず」〔浣濯之服、蠶桑之務、古天子後禮安而常行者也、而今之庶人孽妾羞言之〕であるのを批判しているので、妻が家事に自ら手を下さず、他人にまかせようとする行為に反発していたことは明らかである。同時代人の曾鞏と梅堯臣は、文人の伝統的な一面を残しており、妻が女性の機能（服装、食事などのすべての家事）を完全に果たすよう期待していた。更に一歩進んで、妻たちが日常の家事を本分と心得、自覚を持って主体的に取り組むように望んでいた。

次にあげられるのは、女性の才学に対する高い評価である。宋代の女性は前代よりも高い文化的な素養を持っており、次第次第に世人の注目を集めて行った。梅堯臣であれ、曾鞏であれ、彼らは女性の才智を十分に認識していた。彼らの筆下に描かれる妻たちは高い読書力を持ち、自らの作品まで残している。彼女らは儒家の著作や、仏典を熟読し、子女を教育して有為の人材を育て上げた。梅堯臣の筆下では、吾嘗て士大夫と語りしとき、謝氏は多く戸屏従(よ)り竊かにこれを聴き、間(ひま)あらば則ち尽(ことごと)く其の人の才能賢否及び時事の得失を商搉し、皆条理有り」〔吾嘗與士大夫語、謝氏多從戸屏竊聽之、間則盡能商榷其人才能賢否及 時事之得失、皆有條理〕、「吾れ呉興に官し、或いは外自り醉いて歸るに、必ずや問いて曰く、今日孰と與に飲みて楽しむやと。其の賢なる者を聞くや、則ち悦び、否(しから)ざれば則ち歎じて曰く、君の交わる所、皆一時の賢雋なり、豈に己を屈してこれに下るや。惟だ道徳を以てするのみ、故に合う者尤も寡し。今是の人と飲みて歡ぶや？」〔吾官呉興、或自外醉而歸、必問曰：‘今日孰與飲而樂乎？’聞其賢者也則悅、否則歎曰：‘君所交、皆壹時賢雋、豈其屈己下之邪？惟以道德焉、故合者尤寡。今與是人飲而歡邪？’〕(欧陽修「南陽県君謝氏墓誌銘」)であった妻の謝氏がそのよい例である。曾鞏の筆下では以前に引いた、「人と爲りは明識強記にして、圖籍を博覧す、子孫は學を受かり、皆自ら先生と爲」〔爲人明識強記、博覽圖籍、子孫受學、皆自爲先生〕った王氏や、「詩七百篇有り、其の文は靜にして正しく、柔にして屈せず、言に約にして禮に謹しめる者なり」〔有詩七百篇、其文靜而正、柔而不屈、約于言而謹于禮者也〕であった周氏など

がその例である。

一方で彼らの相違点もはっきりしている。かいつまんで言えば、梅堯臣が追求したのは、平等な相互理解に基づく伴侶の関係であり、また彼は自分の妻の美貌を心から賛美しさえしたのである。「損益を勘酌し、必ず經に本づき、必ず仁義に止まる」〔斟酌損益、必本于經、必止于仁義〕[15]人であった曾鞏は、「家は世よ儒爲り、故に他を業とせず」〔家世爲儒、故不業他〕（「上歐陽學士第一書」）とあるように、儒家の伝統を継承する家庭に生まれ、知らず知らずのうちに、儒家の薫陶を受けたのであった。彼は一生を通じて儒家思想を遵守し、儒家の学問の研鑽に励んだ。長い間儒家文化の影響を受けた彼にしてみれば、妻の容貌を露骨に賛美するわけにはいかなかったのであろう。曾鞏の女性に対する評価も、多くは道徳や人格の角度から行われており、これは彼の女性墓誌銘から実証することができる。二十五篇の女性墓誌銘において、妻の容貌など、外に現れた美の描写を見出す事はできない。次に彼が追い求めた理想の妻像であるが、夫に従う妻、夫を助ける妻、という伝統的な儒家思想の枠内のものであるとともに、「益友」としての妻という側面もあった。

その他曾鞏は、女性は嫁ぐ以前にきちんとした教育を受けなければならない、という考えを持っていた。このような思想が女性墓誌銘の中で提唱されることはそれほど多くないであろう。そのことを彼は「夫人周氏墓誌銘」ではっきりと述べている。

> 昔先王の教えは獨り士大夫に行わるるのみに非ざるなり、蓋し亦た婦教有らん。故に女子には必ず師傅あり、言動は必ず禮を以てし、其の德を養うには必ず樂を以てし、其の行いを歌い、其の志を勸むると、夫（か）のこれをして以て微を託して意を見（あらわ）しむるとは、必ず詩を以てす。此れ學ぶに非ざれば能わず、故に教えは内外に成り、其の俗は美なり易く、其の治は洽（やわら）ぎ易きなり。茲の道は廢れ、夫人の學の如きは、天性より出で、言行は法度を失わず、是れ賢とすべきなり。
> 〔昔先王之教、非獨行于士大夫也、蓋亦有婦教焉。故女子必有師傅、言動必以《禮》、養其德必以《樂》、歌其行、勸其誌、與夫使之可以托微而見意、必以《詩》。此非學不能、故教成于内外、而其俗易美、其治易洽也。茲道廢、若夫人之學出于天性、而言行不失法度、是可賢也已。〕

これらはすべて学習を通して達成されるのであり、女性に教化を行うことによって、一国の風俗は正され、一国は整然と統治されるのである。残念なことに、古代

[15] 脱脱撰『宋史』曾鞏傳（臺北：臺灣中華書局　一九七七年刊）卷三一九。

の聖王は女性に対する教化の道を心得ていたのに、現在は「茲の道は廃れ」てしまったのである。

曾鞏の女性墓誌銘の中に、我々は「婦道を盡くし」、「夫に順從し」、「其の夫を助ける」といった、称揚されるべき伝統的女性のイメージを見ることができる。しかし、同時にその女性墓誌銘には、女性の学才に対する賞賛と、女性に対する教育を推進せねばならないというメッセージを読み取ることができる。梅堯臣が悼亡詩をはじめとする詩作の中で、自らの大胆な見解を披瀝したと言うとすれば、曾鞏は、墓誌銘の中で自分の見解を表明したと言えるだろう。これが曾鞏の特異な点である。

中国の伝統文化の中で、女性墓誌銘の描写の基本原則は、実事求是であり、女性が伝統的普遍的観念に順応していることを称賛するのがその使命であった。具体的には、「女に外事無し」〔女無外事〕、「三從四德」〔三從四德〕、「貞女は二夫に事えず」〔貞婦不事二夫〕等などの正統的な観念である。もちろん、墓誌銘の作者は身分や人間関係を考慮して、様々な原則や観点に基づいて書き始める。例えば、友人の妻の墓誌銘を書く際には、家庭全体に対する貢献に大部分の紙幅を費やし、自分の妻の墓誌銘を書く時には、妻の自分に対する細心の気配りを強調するなどである。どのような人の墓誌銘を書くにせよ、内容は「其の世系名字爵里行治壽年卒葬年月と子孫の大略を述べ、石に勒して蓋を加え、壙前三尺の地に埋め、以て異時陵谷變遷の防ぎと爲し、これを誌銘と謂う。其の用意は深遠にして、古意において害無きなり」[16]〔述其人世系、名字、爵里、行治、壽年、卒葬年月與其子孫之大略、勒石加蓋、埋于壙前三尺之地、以為異時陵容變遷之防、而謂之誌銘、其用意深遠、而於古意無害也〕や、「誌銘の壙に埋めらるる者は、文は則ち嚴謹たり。…大抵碑銘は德善功烈を論列する所以にして、銘の義は美を稱えて惡を稱えずと雖も、以て孝子慈孫の心を盡くす」[17]〔誌銘埋於壙者、文則嚴謹。…大抵碑銘所以論列德善功烈、雖銘之義稱美弗稱惡、以盡其孝子慈孫之心〕に他ならない。しかし、曾鞏の墓誌銘には、彼の実事求是の精神が見て取れると同時に、特にその女性墓誌銘において、読書を好み、才識を備え、詩作を遺した女性の躍動するイメージを豊富に読み取ることが出来るのである。交際の道具と化し、内容と形式が固定化し、謹厳な文体を用いて書かざるを得なかったの墓誌銘というジャンルにおいて、曾鞏は規格外の、斬新な

---

[16] 羅根澤校點『文體明辨序說』（人民文學出版社 一九八二年刊）一百四十八頁。
[17] 参照注７。

内容を溶け込ませていったのである。これこそ曾鞏の女性墓誌銘の際立った特徴ではないだろうか？

曾鞏が「國を治むるには必ず其の家を齊う」[18]〔治國必先齊其家〕というテーゼを意識していたことは明らかである。彼は女性に婦功などの教育を実施することにより国家の風紀を矯正しようと考えていた。先に述べたように、「曾鞏は儒家の道を用いて「衰えたるを扶け缺けたるを救」〔扶衰救缺〕おうと主張し、「古代の聖王の意に沿うという前提の下、法制度の改革を試みた」（『曾鞏集』前言）のであった。そこで彼は伝統的な思想を継承したうえで、改革の道を探っていた。曾鞏が「説内治」の結論部分で、「古語に曰く、福の興るや、室家に本づかざる莫し、道の衰うるや、閫内に始まらざる莫しと。豈に風俗の厚薄、人道の邪正、壽夭の原とこれに繋かるに非ざらんか。其れ以て忽然として恣に流れて返らざる可きや。曰く、これを如何すれば返す可きやと。曰く、今の敝を放ち、古の制を考え、これを公卿大夫の家に先んずれば、茲れ可なりと。易に曰く、家を正して天下定まると。吾が説は疏ならんや」〔古語曰：福之興、莫不本乎室家、道之衰、莫不始乎閫内。豈非風俗之厚薄、人道之邪正、壽夭之原系于此欤？其可以忽然流咨而不返欤？曰：如之何而可返？曰：放今之敝、考古之制、而先之于公卿大夫之家、茲可也。《易》曰：正家而天下定〕と述べる通りである。

おわりに

以上の論述から、曾鞏は儒家の思想を遵守すると同時に、その基礎に立って、儒家の思想を更新していたことが分かる。彼の女性墓誌銘には、いくつかの感動的なエピソードが含まれており、実用性と文学性を兼ね備えていると結論付けられるだろう。また、これらの墓誌銘から、曾鞏の抱いていた理想の妻像を見て取ることができる。現実の生活において、妻はまず家庭全体に対し大きな責任を担っており、勤勉で賢明、婦道を守り舅姑に孝養を尽くし、家族の構成員間の関係を調整し、夫に従順で、夫を補助する存在であった。次には、妻は機敏な執事頭でなければならない。自ら女性の仕事をこなすのと同時に、子女を教育し、家庭内の事務をきちんと処理せねばならない。このような妻のイメージから、曾鞏は規範的な女性を称賛

[18]『禮記鄭註·大學第四十二』（臺北：臺灣中華書局　一九七〇刊）巻十九。

するとともに、「古代の聖王の意に沿うという前提の下」、儒家の伝統に対し様々な改革を試みた事実を観察することができる。彼は女性に教育を施すことを提唱し、女性が学問をし、読み書きを身に着け、才華に富んだ女性に成長することを強く望み、日常生活で自分の役柄をきちんと演じ切るよう期待したのであった。曾鞏は女性墓誌銘を創作する過程で、現実生活の基礎に立ち、理想の妻のイメージを構築したのであった。

【附録】曾鞏略年譜

天禧三年（一〇一九）　一歳　南豊（江西省）南城に生まれる。
天聖二年（一〇二四）　六歳　父の易占宋郊榜の進士に登第。
天聖四年（一〇二六）　八歳　生母呉氏が亡くなる。
天聖八年（一〇三〇）　十二歳　「六論」を試作する。欧陽修がこの文を見て驚嘆する。
至和元年（一〇五四）　三十六歳　晁氏と結婚。
嘉祐二年（一〇五七）　三十九歳　進士科に合格した。太平州（今安徽当涂）司法参軍。
嘉祐五年（一〇六〇）　四十二歳　館閣校勘、集賢校理、兼判官告院。
嘉祐七年（一〇六二）　四十四歳　晁氏が亡くなる。
治平元年（一〇六四）　四十六歳　李氏と再婚。
熙寧二年（一〇六九）　五十一歳　越州（浙江紹興市）通判。
熙寧四年（一〇七一）　五十三歳　斉州知州（山東済南市）。
熙寧六年（一〇七三）　五十五歳　襄州知州（湖北襄樊市襄陽城）。
熙寧十年（一〇七七）　五十九歳　洪州知州（江西南昌）　福州知事（今福州市）。
元豊元年（一〇七八）　六十歳　明州知州（寧波市）。
元豊三年（一〇八〇）　六十二歳　滄州知州（河北市）。
元豊四年（一〇八一）　六十三歳　史館修撰。
元豊五年（一〇八二）　六十四歳　中書舎人。
元豊六年（一〇八三）　六十五歳　四月江寧府（南京市）でなくなる。

Zeng Gong(曾鞏)'s image of the ideal wife

—with a focus on his epitaphs of women

Lin Xueyun

Zeng Gong (曾鞏), one of the eight greatest prose writers of the Tang and Song (唐宋) dynasties, wrote sixty epitaphs, twenty-five of which were those of women. In this paper, through analyzing his epitaphs of women, his lesser-known article "Domestic management" (内治 Neizhi), and his five poems describing his wife (her family name was "Zhao 晁"), I investigate his image of the ideal wife.

The ideal wife should have basic virtues associated with women, such as piety, benevolence, politeness, and obedience. He also insists that the ideal wife should obey and assist her husband, and at the same time should be a sophisticated and talented woman. His keen observations of life provided a basis not only for his many epitaphs of women, but also for the image of the ideal wife; I argue that this image reflects the spirit of that period.